

あけのほし 2013年8月

「平和の建設」

菊田行佳

「妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当だつてはならない。子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです。父親たち、子供をいらだたせてはならない。いじけるといけないからです。」
(コロサイの信徒への手紙3章18-21節)

毎年この時期になると、日本の各地で平和への祈りが捧げられます。戦争への記憶を思い起こして、あのような苦しみを、二度と繰り返さないようにと願い祈るのです。

ただ、これはよく言われることでありますが、平和というのはどこからか降って与えられるものではなく、そのまま何もしないで維持されるのでもないということです。平和を願う祈りの中には、わたしたちが平和を共に建設して行くということが含まれています。わたしたちの日々の生活の中で、平和を築いて行く地道な一步一步が、大きな戦争などの苦しみを逃れる唯一の道なのであるでしょう。

そこで、では、何をしたらわたしたちは平和を作って行けるのか。何か特別な平和運動のようなことをしなくてはならないのかという疑問が挙がるものと思われまふ。世界の平和ということはとても大事だと思うけれども、日々の自分の生活を支えることで精一杯で、正直特別な平和運動などにかまふ余裕がないというのがわたしたちの多くの場合の現実であるでしょう。聖書は、まさにそのような日々のわたしたちの当たり前の中生活の中にこそ、実は平和を建設する場所かおるのだと言うのです。

今回の聖書の箇所では、世界の平和を築いて行くところというのは、実はわたしたちの家庭の中にあるのだと言います。どの地域においても、どの時代においても、社会を構成する最小単位は、それぞれの家庭であります。その一つ一つの家庭が平和であるのなら、社会全体が平和になるのだということです。そして反対に、それぞれの家庭が平和とはかけ離れた状態になった時、世界の平和は壊れて行くのだということです。

ここではまず、妻と夫という夫婦間の関係が何よりも家庭の平和の鍵を握っているのだと言われてまふ。聖書ではそもそも人間の苦しむは、この夫婦間の争いから始まっているのだという洞察がなされてまふ(創世記3章)。家庭の中というのは昔から外部の力が及びにくいところであつて、法律による人権の保護が届かず、家庭の中の弱い立場の人々が、強い立場の人に力づくで従わされて来た場所だったので。当時においては、夫が絶対的な権限を家庭に対して持っていました。妻は夫の支配の元に服し、その強権に服従させられ、強制的にその指示通りに動かされていたのです。さらに、子どもが家庭の中でおかれていた立場は更に過酷でありました。子どもは現代におけるような子どもの権利などとい

うことは一切認めておらず、親の、特に父親の所有物として、自由に扱われてしまっていました。子どもは親に対して一方的に従うしかそこで生き残る道はなかったのです。

そのような家庭によって、社会が構成されているのなら、社会全体が、力が強い人に対して絶対服従を強いられ、弱い立場の人々がその支配に苦しまなくてはならなくなるのも当然なわけです。家庭の中で、人が人を支配し、強いものは弱いものを自分の利益のために自由に利用して良いことを学んでしまうのです。子どもたちは、大人になったら、少しでも序列の上に行って、序列の下にいる人を犠牲にして生きて行くのが当たり前の世界なのだと言ってしまうのです。

現代では、当時ほどの露骨な上下関係によって家庭や社会は構成されていないにせよ、本質的には同じ危険が潜んでいるのだということが言えるのだと思います。現代においても、家庭の中で夫による妻への暴力による支配、親による子どもへの過剰な支配ということは、依然として根強く残っていると看做ざるをえないでしょう。そして、そこまで行かなくても、何かしらの不均衡な力関係、支配関係が家庭の中に、社会の中に存在しているのだと言えるのだと思います。

今回の聖書の箇所は、そのような平和が壊れてしまっている状況の中で、まず家庭から平和を建て直すことの必要性を訴えています。妻と夫との関係から初めて、両者が互いに相手を平等の立場で愛することが何よりも先決なのだと言うのです。どちらかが、どちらかを力で支配し、強制的に従わせることを放棄するようにと言います。そして、親子関係においても同様で、親は子どもを自らの持ち物のように扱ってはならず、また、子どもは親の犠牲の上に、自らの欲求を満たしてはならないのだと言います。

神さまは、すべての人間を、等しく愛してくださっています。妻も夫もなく、女も男もありません。子どもと大人の間には、神さまの愛の序列は存在していないのです。そのような神さまの立場に立って、わたしたちは家庭の中で、お互いを大切にしなければならぬのだと思います。そのような家庭で育てられた子どもが大人になった時、その人はきっと、力に訴えて柏手を従わせるようなことは、しなくなるでしょう。そして、相手の国の人々の犠牲の上に、自分たちの繁栄を望む戦争という行為を、放棄して行くことに繋がって行くものと希望が持てます。

世界の平和は、家庭の中から始まるのだと聖書は言います。わたしたちの何気ない日常の中に、世界の平和がかかっているのです。力任せに、相手に言うことを聞かせる自由を、わたしたちは持っています。そしてその一方で、その自由を、相手を本当の意味で建て上させる行動に用いるための自由も、持っているのです。どちらに用いるかはわたしたちに委ねられています。わたしたちはその自由を用いる時、神さまからそのことを任されていることを思い出して、選択をして行きたいと思えます。神さまは、わたしたちに、一人一人を大切に、大切に扱って欲しいと願われています。その願いに答える責任を受け取って、わたしたちの自由を用いて行きたいと思えます。そのことが、家庭に、そして世界に、真の平和を建設して行くことになるからであります。